

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	閉されたる愛
Author(s)	小林, 宣光
Citation	龍南, 193: 42-56
Issue date	1925-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8784
Right	

閉されたる愛

小林 宣 光

——汽車は立野驛に着きました、私は終に來てしまつたと思ひ乍ら降りて衰へた体を櫛木迄徒歩で運びました。生れてから其の途中の道位陰鬱な氣分に拂はれたことはありません、右手に紅葉の奇麗な處がありますね、それが堪らなく嫌な感じを與へるのでした。薄氣味悪い紅葉の色——私は今でもあの色をはつきり思ひ出すことが出來ます、全く屍の中を循つて居るとす黒い血としか見えませんでした、人が死の道を辿つて行く時は周圍のものが皆そう見えるのですね。あんなに好きであつた谷川の囁きが墓場にも流れ込む水の音の様な氣がして、嵐さへも其の爲に喜んだ風の聲が屍の呼吸の様に思はれました、私はほんとにそう思つたのです。

宿に落付いてから私はミエチャンに——さつきから斯う呼んで居るけれども聞き辛くはないでせうね、つい此の親しい名が口からでるのです——最後の手紙を書きました。後で考へると私は濟まないことをしたと思ひます、學校にでも出せば好いのに一週間も一睡だにしなかつた頭にはそんなことを考へる餘裕がありませんでしたから家宛にして仕舞つたのです。以前私が彼女に此の戀を兩親に打明ける丈けの勇氣がありますかと詢いた時、ミエチャンはありませんと何か哀しげに答へました。後になつて聞いたのですが其の筈です、お母さんがステツプなのですから。可愛想に、彼女はどんなに叱られた事でせう、そして彼女の生活はどんなに自由を奪はれたでせう、それを考へると何と云ふ殘酷な罪を私は十六位の乙女に犯したのだらうと詫びる心で胸が一杯になります。手紙の内容が、さあ、私は好く覺えて居ませんが多分取り止めのない言葉の羅列でしたらう、半狂亂の頭から

出た文字ですからね、然し、永遠の讚美に入るとか永劫の愛に入るとか書いたのは覚えて居ます。

其の夜は宿に泊り合せた三年生達と酒を飲みました、そして煙草を吸ひました。煙草——煙草を吸ふのは悪いとは強く思ひ乍らも彼女が私から去つてからそんな事でもして忘れようと努めたのです、それは私を非常に責めました、墮落する、それがあの純な美しい乙女を愛する資格を私から奪ふ様な氣がしたのです、ミエチャンは私から去つても好い、私は獨り寂しくあの幻の様な美を心の中で追求しようと僅かに自ら慰めて居たのに、その墮落の第一歩が彼女の幻影に對する冒瀆の様に思はれたのです。その悩みは私の戀が純であつた丈に、深いものでした、そして墮落する程ならと云ふ氣が此の肉体に別れを告げようとの決心を強めたのです。その夜は私は大部醉つて躍つたり歌つたりしました、然し醉へば醉ふ程死や彼女の幻が心の中に喰ひ入りました、私は其の悩ましさを逃れようと酒をガブ／＼飲みました、そして益々悩んだのです。

翌朝山に登りました。

——突然私は非常な寒さを感じました、同時にあたりが暗くひっそりして居るのに氣が附きました、直ぐ目の前にさつき迄突き立つて居た山の頂を見上げようとしたけれども其處は冷たそうな灰色の雲に閉されて居ました。嵐だ！嵐の前の静けさだ！と私は直覺しました。一夏海岸で暮した時経験した嵐の前の静けさが物凄くひっそりして、其の中に底の知れない凶暴な力が隠されて居る、大地や海に迫る様な静けさを思ひ出しました、その静けさが周圍に漲つて居たのです。暫らくして雪が降り始めました今迄無かつた身を切る様な寒い風が不吉な叫びを揚げて身のまはりを狂ひ出しました。噴火口にはどちらに行くかと諮いた時私の頭の中から足の先迄じろ／＼と疑はしげな目付きで凝視めて、今日は登らん方が好い、それに此の路は違つて居る——それは事實でした、噴火口の有る山を見誤つて居たのです——と言つた馬を牽いて行く老百姓を私は思ひ浮べました。然し、もう直ぐだ、其處では一切が解決するのだ、無となつて私の前に現れるのだと云ふ考へと嵐の好きな性質が心の中に頭を擡げて登り始め丈の高い草を分け乍ら——路らしい路はありませんでした、只馬や牛が水を飲みに下る跡らしいものがあるだけで、それも必ず谷に行つては消えてしまふのです——同じ形の岡を幾つか越ええました。幾度も氣が遠くなるのを引き緊めて二時間も馳せ廻るの

は三四日殆んど絶食して居た体に取つては大抵の努力ではありませんでした、そして或る可成り深い谷の上に來た時は体が凍つてしまはないだらうかと思ふ程の寒さと一歩も動けない位の疲れを覺えて立ち止り、其處にあつた大きな石と石の間に腰を下しました。もう其の頃は烈しい吹雪は小石を交へて唸りを生じ乍ら狂ひ廻るのです、そして五間とは先が見えませんが、暫らく休んで居ると疲れや寒さが急に忘れられました何が何だか遠い／＼所に下りて行く様な心地で胸が一杯になりました、そして夢でも見て居る様な氣持ちになり初めました：薄紫の長衣を纏つたダンテが前を靜かに歩いて行きました、青い火が暗い谷の底で私を呼び招く様な何か知ら望ましい光を以つて燃えたが直ぐ消えてしまひました、黒い姿をした者が眼の前に現れて、幻滅の哀しみだ、お前が戀して居るあの幻の様に美しい乙女は再びお前の前には現實の姿を見せないのだと落着いた聲で言ひました、私は何故？と聞かうとしたけれども黒い姿は消えて無くなりました、明るい光が私の前に表れてそれが段々ミエチャンの姿に變つて行きました、私は今あれが言つたのは嘘だ、ミエチャンは私の前に來たではないか、然し何故斯んな所に居るのだらうと思ひました、彼女の顔には何と云ふ哀れな男だらうと云ふ表情が見えましたがやがて冷やかな嘲笑みに變つて行きました *Winty smile*！其の時の冷い微笑、今思ひ出して見ればそれは學校の行き道で最後に遇つた時彼女が私に送つた笑みであつたのです、その冷い微笑が私の胸にどれ程深く刻まれたか——それから私は長い戀の追想を初めたのです。

——ミエチャンが私の心の中に輝き始めたのは私が未だ小學校の五六年の頃であつた、その時分は彼女はほんの嬢ちゃんであつた。幻の乙女——私が愛著を感じたのはその幻の様な時であつた、私の幼な心に地上のものではない様に思はれた姿であつた。ミエチャンの家が初めは何處にあつたかは覺えて居ない、唯臆ろな少年時代の記憶を辿ればミエチャン一家は停車場へ行く大通りの下の傾斜した小高い所にある家に暫らく住んで居たことがあつた、然しそれも他の何所からか移つて來たのであつた、私は其の時分から讚美の眼を以つてミエチャンを眺めて居た。それから私の家の上にある〇〇學校の前に新らしく家が建てられて（其の時或る死が起つたが彼女はそれを知つて居るか知ら）ミエチャン達は其處に引越して來て現在に至つたのである。私は彼女と何時奈んな所で遇つたか好く覺えて居る、ミエチャンは小學校——同じ學校ではありませんでした——の五、六年になる迄お

父さんと男湯に這入りに來た、それで度々湯屋で遇つた。家が近かつたので路傍でも好く遇つた、其の時は私は清らかな讚美の心を以つてミエチャンを見た——その幻の様な美は私には驚異であり喜びでした——私が完全に戀であると自覺したのは今から四年前で、——一九二一年の夏の日誌に初めてそう書いて置きました、それも阿蘇に行く前日に皆燃して仕舞つたのです。彼女のお父さんが Moneylender であると聞いたのもその頃でした、其の事は半信半疑であつたけれども後になつて貧しげな人々が時時白瀬さんの家はどちらですかと詢ねて來るのを見ては本當だと思はねばなりませんでした。そして自分の美しい肉体は貧しい人々の膏血であると悟らなければならぬのはどんなに苦しいことだらうと考へて可哀想だと思へば益々彼女が好きになつたのです——惱み初めたのは昨年——一九二二年、矢張り日誌で——の一月頃であつた。夜はよくミエチャンの夢を見た、そして朝起きて見て幻の美に對する追求の情がどんなに切になつて居るのを感じたか——入學試験準備の重苦しさでも其の惱みに比すれば何者でもなかつた。試験の日私が家の前の小路に立つて居るとミエチャンが一人の友達と一緒に歩いて來て、通り過ぎてから二人で振り返つて私を笑つた、——何故？私にも解りません、多分私の顔が餘り青白かつたから、私は幾何や代數を考へる代りに彼女のこと許り考へて居たので準備は殆んどして居ませんでした、で失敗だらうと思つて居たのです、其の上非道く頭を悪くして居ました——入學後間も無い暖かな五月の夕べに私が何かの用事で大島君の内にいかうと家を出た時ミエチャン（其の時分は只白瀬と云ふ姓を知つて居るのみであつた）は私の内近くの路傍で私達が小供の時に蛇の人參と呼んだ草花を摘んで居た、私はその時話し掛けて戀を打ち明けようとどんなに思つたか——彼女を後ろにして歩かねばならなかつたあの時の氣持を今でもはつきり繰り返すことが出來ます——そして夏になると夕べにミエチャンは常に小犬を連れて前の田圃へ散歩に降りて來た、私は彼女を心の中で das mädchen mit dem Hundchen と呼んだ。それでも話し掛ける丈けの勇氣は無かつた、あの戦ひの爲に。

私は自分の性格にどれ程苦しんだか、自己と云ふ人間が嫌ひで、此れ位低劣な人格は無いと考へて來た、過去の醜惡なる暗影より逃れ得るならばと幾度希つたか……コンキエビツSNSに付いても種族保存の偉大なる力は私を壓倒しうであつた。私は戦つた、私の其の絶對の力に叛逆を企てた、反抗した、戦つた、そして漸く醜い敵を殆んど征服することが出來たのだ——それは

此の八月の末であつた。私は憧憬れて居た純に歸著し得たのである、何と云ふ歡びであつたらう！以前私の夢に現れた彼女に對する行動は良心なき野獸性に立ち戻る夢の中とは云へ純と言へたであらうか、恥づ可きことではなかつたか。八年も私の心にいて居た戀を彼女に打ち明ける丈けの勇氣を私に與へた者はその大なる喜びであつた、純に歸著したと云ふ歡びであつた。——食慾は三年前から征服に努力し始めましたが此れはより以上に至難な事と云はねばなりません、個体自身に取つては自己なる者は種族よりも大切でせうから。人間生活上絶對である此の二つの慾望を否定する力を自身の内に得ると云ふことは十六頃からの私の理想だつたのです——。

そして九月五日の夕べに非常なる歡びを以つて彼女に戀を打ち明けたのだ、あの夕べ！思ひ出深い夕べよ。ミエチャンが前の田圃でイナゴを取つて居るのを書齋から見た私は話し掛けようと決心して家を出た、けれども乙女に、今迄言葉を交したことの無い乙女に話し掛けるのはどんなに勇氣が要ることか、私は半時間も勇氣を出す爲に道を行つたり來たりしなければならなかつた、そして終に私は白瀬さんの言葉を以つて彼女に話し掛けた：あの夕べの思ひ出何と云ふ懐しい夕べだつたらう、然し又同時に哀しき思ひ出である。

彼女は私と散歩することを承諾した、私は彼女の名を聞いた、私は長い間彼女に戀して居たと話した、彼女は顔を紅めた、そして私の存在を小さい時から知つて居たと答へて、私の名を知つて居た、私はあなたを見て居るとチュリンゲンの森に住む美しい妖女でも見る様な氣がすると云つた、彼女は恥しそうに俯いた、私は話した、すると彼女は言葉少なく答へた：夢の様である。それ以來私は熟睡と考究と讀書とを奪はれてしまつた、夜となく晝となくあの美しい幻を追求した。然しそれは純であつた寔に純であつた、夢の中ですら清らかになつた、散歩する時二人は路の兩側を歩いた、抱擁とか接吻とかは想像さへしたことがなかつた。四日會はないことがあつた、私は奈うすることも出来ないで五日目の夕べに曳き摺られる様に彼女の家の傍に足を運んだ、そして前を過ぐる時私は柵根の間から見る可からざるものを見た、直ちに目を臥せたけれども私は其の時程良心に責められた事はない、私はそんなに卑しい心の所有者なのだらうかと悲しんだ、見る積りではなかつたけれども結果は其れと同じでは

なからうか、私は○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○！私は心の苛責に堪ふことが出来なくて翌日會つた時彼女に話して許しを請ふた、彼女は眞面目になつて許さないと只一言答へたのみであつた、それでも私は心の休まるのを覺えた。會ふのは一週間に二日位であつた、私は惱ましかつた、不満足であつた、毎日でも會ひたかつた、同時に女子高等師範に來年受ける爲一生懸命に勉強して居ると云ふ彼女の心を會つて攪き乱すことを怖れた。然し會ひ度い心は何うしても制し得なかつた。

五日も會はなければ一と月も顔を合したことが無い如く思はれる程苦しかつた。彼女も會つて話す時間が少いから手紙を下さいと云つた、それで私は決して遊戲化さないのを誓つて毎日手紙を書いた、然し遂に其れは惱ましい愛の言語に更つてしまつた朝學校に行く時十間もない道を時刻を合せて行くことを思ひ附いた、そして遇はない時は（その方がよつ程多かつた）失望した彼女は五高の運動會がある時修學旅行で四日間熊本のを離れなければならなかつた、彼女は奈れ程其れを呪つたか、そして旅行先から毎日私に手紙を出した。

斯くして一箇月半は夢の如く過ぎた。樂しかつたか！否それは惱みの連續であつた、その間に私の愛は益々深刻になつて行つたのである。

然し、然し、何故か急に彼女は私に手紙を書かなくなつた、散歩にも降りて來なくなつた。で私は病氣か知らんと思つたけれども學校へ行く途中——其れ以來彼女は明かにそれを避けて居ました、と云ふのは私が特に早く内を出るか遅く出るかした時のみ彼女に遇つたのですから。それでも彼女は常の様に私に幻の様な眸と微笑を與へました、女性の殘忍？私はそう考へたくありません、私は餘りにミエチャンを愛して居ます、そして無邪氣な彼女が、そんなことをするとは考へられないことです——に遇ふのを見れば病氣でもなかつた。兩親に知られたのか、大島君はそう云つた、然しそれなら私に報す位のことは出來たであらうし、私には奈うしてもそんな氣はしなかつた。Agony of suspense！あの二週間の苦しみは！臨時試験の間に——無論少しも調べては行きませんでした、そして成績は思つた通りでした——彼女は私が貸した復活を返した、それには一片の紙が挿んであつて、學校で怪しまれたうだから手紙を出して下さいますな、家へでも勿論困ります、散歩にも行かれませんが、と書いてあつた

私は總てが終つて前途が暗くなつて仕舞つたと想つた、破壊された様な氣がした。即日私は去り行く者は追求しない、結末を與へてくれと書き送つた、そしてさようならの記しに黒い喪章を結んで入れた。私は生きて行くのが嫌になつた、地上の物の全てが光を失つた様に見えた。二、三日経つてから返事が來た、愛し得ないと書いてあつた。私は日誌や感想を書き連ねたものを全て焼き棄てた——彼女の手紙や私の下書きは大島君に預けて十二月になれば君の所有になると言ひました、大島君は變な顔をして受け取りましたが私がかまかさんな馬鹿げたことをするとは思はなかつたでせう——そして無斷で家を出て阿蘇行の汽車に身に乗せた。

追想が終りに近づいた時意識が次第に恢復されて行く様でした。怖ろしい暴風の叫びが急に耳に入りました父や母や兄や妹のことが一人一人想ひ出されました、自己表現に依る理想の人格に至る楷梯の第一歩を漸く踏んだ時私は肉體としての存在より去つて行くのだ、十九年の生涯は短いものではなかつたかと云ふ考へがしみ／＼と心に浮びました、そして私は再び完全な現實に立ち歸つたのです。疲勞や寒氣に對しては全く無感覺でした、死——此處で死ぬのだ、ミエチャンの爲に——噴火口へ？否、嵐の中で靜寂に歸つて行かう、永遠の愛へ、永劫の讚美に入るのだ……再び暴風の叫びが斷末魔の唸り見たいに聞えました、私は重い眼を開いてあたりを見廻しました、雪が横に飛んで行くのが見えました。すると其の時突然眞に突然異常な歡喜が私の心を捕へました、私は忽焉として嬉しくてたまらなくなつたのです、同時に私を中心としてあたりが光を以つて充されました、私は歡びの餘り其の場に泣き臥すと天來の聲が自分の心の中に起つた聲が「大地を愛せよ……貧しき人々……」と云ふ言葉を聞きました私は無意識に雪を掻き除けました、黒い土が見えました、土——噫、土——私は大地を抱きました、そして感激の涙に咽び乍ら、大地よ、私は愛する、永久に愛する、と言つて土に唇を接けました、地上に住む人々、何と云ふ愛す可き人々だらう、貧しき人々貧しき人々——私は愛する——と叫んで夢遊病者の如くフラ／＼と歩き出しました。その時は一切のもの、人生、社會、國家を一瞬の間に電光の如く速かに理解してしまつた様な氣がしました、そして石か何かに躓いて谷の中に轉げ込んで行つたのです、心は歡びに包まれて肉體から離れて行く様な氣がして……

——それで奈うなつたと思ひますか、勿論そのまゝ死にはしませんでした、今斯うして話して居るのですから。省みることの出来ない遠い處から、又非常な苦痛の中から我に歸つて目を開いた時は小屋の中に寢せられて、道を詢いた老百姓が只一人傍で私を看取つて居ました、側に火が燃えて居ました……現實に歸りかけた時私が心の中で最初に呼んだのは誰と思ひますか、父母でもありませんでした、貧しき人々でもありませんでした、ミエちゃんだつたのです！三四時間してから私は氣持が快くなりました、そして吹雪になつたので心配して彼が私を探しに引き歸し、谷の中に倒れて居る私を見出して近くにある此の小屋に背負つて來たのを聞きました。吹雪はあれから直ぐ止んだらしいのです、彼は私を可成り遠くから見ることが出来、私は未だ息をして居て、體は充分温かだつたそうですから、それにしても三時間も前に遡つた老人が何うして道もない處を歩いた私をそんなにたやすく發見することが出来たのでせうか。

老人は無口でしたけれども始終私を凝視して居ましたから私には彼が私の心理を全て知つて居る様に思はれてなりませんでした、それで私は死ぬ積りであつた等と云ふことは少しも言はなかつたし、何故か再び自分に生命を與へたる人と云ふ氣も起りませんでした。やがて老人は私に歩けるなら下りようと言ひましたから私は苦痛と空腹を覺え乍ら老人と一緒に山を下りました、下山——それが私の平凡な下山だつたのです。老人は黙つて居たけれどもその霞んだ兩眼には私に對して「哀れな迷へる者」と云ふ憐みが充ちて居る様に思はれました。私は禮を言ひました、そして老人が誰であるかを諮くと彼は不氣嫌そうに、そんなことは聞かんでも好いと言ひました、私には初めて感謝する氣が起りました。すると忘れられて居た貧しき人々に對する愛——戀に近い愛が胸の中に蘇り始めました、けれども此の老人がその一員であるとは考へませんでした。

貧しき人々——私が貧しき人々に對する愛を感じ始めたのは食慾征服を思ひ立つた時分です。それ以來私は勞働者の前を平氣で通れなくなりました、乞食の前を涙無くしては歩けなくなりました、そして必ず、あゝ、私は愛して居ると思ひました。中學に居た時礦物の時間に教師が或る地方の貧民は腹を膨らす爲に硅藻土を食ふと言つた時私は紅くなりました、何か恥づかしい自分の秘密を發かれた様な氣がしたからです、そして後で私は確かに戀に近い程愛して居ると思ひました。貧しき人々と私は言ふけ

れども可哀想な虐げられた人々とする方が當つて居るでせう、本妙寺に居る乞食です、私にも勿論氣持の好いものではありません、然し、其れ以上に私は何者かを感ぜずには居られないのです。彼等の子供を見るとあの白い手足はやがて忌はしい病氣の爲に潰れて行くのだと思へば自然と涙が出て抱き緊めて接吻してやりたい位の衝動に驅られます。ミエちゃんに戀を打ち明けてから間も無くてでしたが彼女の家近くに一人の見る影もなく衰へた乞食の老婆が炎天の下に歩けなくなつて蹲つて居るのを巡査が——その町の者ですから私は彼を知つて居るのです——おつ拂ふとして口汚く罵つて居たのを見た時私は熱い涙が出ました、そして其の巡査を憎みました。

私は彼等を愛して居る、然しその愛の表現なる事は少しも知りません、考へたこともありません。只愛して居るだけです、愛して居るばかりです、此の愛を奈うすれば好いのか解りません、唯、心の中の光と云ふのみです。

——老人の後から歩いて行く時私はその光を嘗てない明瞭さを以つて見ました、貧しき人々に對する愛の光が私の心の中に輝いて居るのを其の時位明かに眺めたことはありませんでした。暗黒の周圍の中に弱々しく輝く光——然し其の光を凝視する時私は何時でも寂しくなります、何と云ふ寂しい人生だらうと思ひ乍ら歩きました。そして人家近くなつて老人は私にもう一人で歸れと言つた時、私は再び以前の問を發しました、答も以前の通りでした。老人は私の姿が見えなくなる迄立つて居て私を見送りました、私は心から感謝しました。

——頭と体の疲勞を癒やす爲四日程温泉に浸つた後で家に歸りました、家では何とも言ひませんでした。何か起つて居なかつたかと言ふのですか、そう、可笑しいでせう、何も起つては居ませんでした。それは私が疑問とする所です、自ら死ぬと公言するものは其れを決行しない、其れは事實です、然し私は公言はしませんでした、それでもあの手紙の中には何かそれと覺る可き所……そんなことは奈うでも好いですね、兎も角私はそれが社會的發表とならずに済んだことを非常に喜びました、彼女の爲に——

山上の歡喜——それは私には神秘としか解釋されません。尤も、あんな感激は前に二、三度経験した事があります、それは多分

に宗教的色彩を帯びて居ました、けれどもあの時の感激は前のは全く違つて居ました。自分を中心として周囲が明るくなる！そんな事は有り得可からざることであらう、然し私はあの明るい光が私から周囲に擴がつて行つたのを否定することは出来ないのです。あの斷片的な言葉は天來の聲であつたか、自分の心に起つたのか私には解りません。アリョーシャ？私は其の場では思ひ出しませんでした、總てを忘れて仕舞つたのですから。湯に浸つて居た時彼の姿を思ひ浮べて獨りで頗笑んだ事があります、そしてあの瞬間はドストイ、エフスキーの描いた完成的人格に幾分か近かつたらうと考へました。

歸つてから私は失戀の悩みを忘れたのでせうか？否！決して忘れはしませんでした、それはあなたが「君は一箇月程前から何か内部の大きいなるものと戦つて居る、阿蘇に行つてから特に激しい様だ、やつて居る哲學上の悩みでも君に不安を與へるのか」と私に詢いた事がありますね、それで好く解るだらうと思ひます。今迄あなたに私の戀を話さなかつたのであなたはそう思つたのでせう、而も私は九月以來哲學を讀まなかつたのです。

氣が落ち着いて來ると失戀の苦惱が如何に深刻であるかを發見せねばなりませんでした。彼女から愛し得ないと云ふ返事を受け取つた時は怖ろしい渦卷の中に捲き込まれて何も考へる餘裕がなかつたから——氣が少し變になりました、自分の体が豆程に小さくなつて其れを自分と云ふ私の掌の上に乗せて眺む様な氣がしたり、常に一、二、三と數へて居て九迄行くと十なる數が怖る可き爆發性を有して居る様な氣がして又一、二、三から初めたり——只彼女無くしては生きて居れないとのみ思つたのです。時が經つて連れて解剖的自覺的となり、私の失つた者が如何に大であるかを認めねばなりませんでした。あんなに平凡の裡に別れるには私の戀は培はれた時代が餘りに長くはなかつたのでせうか、そして私は餘りに眞面目でした、餘りに深く愛して居ました。私が阿蘇に行かうと決心した時とは比べ物にもならない殆んど想像も及ばない苦しみを嘗めなければならなかつたのです。戀——戀などは決してするものではありませんね、然し私の様な場合には奈うすれば好いであらう。私は晝も夜も悩み續けました、彼女の美に對する追求は暴虐にも等しい力を以つて私の胸を搔き亂したのです、そして彼女の心が私から去つたと想へば彼女の美は壓倒的に私の心に蘇りました——歸つてから一度も遑つた事はなかつたのですけれども。

彼女が何故に私を愛し得ないと宣言したか私には解りません。女性なるものは家庭の叛逆者とはなり得ない、故に結婚問題に自身が到着すれば自己の戀を棄て、仕舞ふと云へば其れ丈けの事です。然し彼女は私にはもつともつと無邪氣に思へました、ほんの十六ですよ、彼女は常に私の傍に居たいと言ひました、會ふ機會と時間が少いのを嘆きました、會はれる爲に私が可哀想だと思ふ程の苦心をしました。それなのに何うして急に私を愛し得ないと言ひ出したか、最後の手紙には斯う記してありました「あなたは此の間二人の間には離別が來ようなどとは考へられないと云ひましたね——私は心の、積りでした——あの言葉は私の胸に深く響きました、其れは結婚を意味するに極まつて居ます、誰かが結婚は戀の幕場だと云ひました、今二人が永遠にと誓つてもそれは必ず破らる可きものに極つて居ます——此れは確かな事實です——それで恐ろしい結果が起らない内に早く別れてしまひませう、仰せに従つて愛し得ないと言ひます、剎那生より。然しあれ程愛して居た彼女が急にそれを思ひ切り得るか、私には考へられないことです。彼女自身が結婚問題に到着したのでせうか、それとも家庭で實際に其の問題が起つたのでせうか、或は彼女には *Engage* があつたかも知れません、彼女は兄弟もない本當の一人娘ですから。何故質ねなかつたと云ふのですか、私は聞きたくなかつたのです、そんな事を質ねるのは恥ず可きことの様に思はれましたから。そして諮ねる必要もありませんでした、私は *Marriage* とか *adoption* とかは嫌ひなのですから——彼女は理性の強い乙女でした、靜かでした、落ち着いて居ました、それで初め私は熱愛の言葉を以つて彼女の理性を奪つたけれども彼女は次第に其れを恢復して、愛す可からざる者を愛するわけには行かないと考へたのでせうか。若しそうだとすれば彼女は驚く可き女性に相異ありません、何となれば私は反對に、戀を打ち明けて以來初めの間は何處にも輝く理性と云ふ信念の下に自己の戀を眺めて居たけれどもその信念は直ちに打ち消されて仕舞ひました、そして戀が白熱する所、理性と戀とは全然別にして考へねばならぬことを知つたのですから。初めの私の願ひが餘りに切であつたので彼女はツイ曳き摺られたのだけでも暫くすると嫌ひになつたのでせうか、然し最後迄送つた愛の言葉を考ふればそうでもありません。両親に知れて斯う書く様に強ひられたのでせうか、でも文面からはそう考へられないでせう。ジョー・ルジョーがイツボリータに書き送つた手紙よりも惱ましいと思はれる程の惱ましい愛の言葉が淨らかな乙女の心に怖ろしくなつ

たのでせうか、私と云ふ底氣味の悪い虚無的な其の癡神秘主義の思想や性格の所有者が恐ろしくなつたのでせうか、何れにしても理由は解りません。彼女があれ程愛して居り乍ら急に愛し得ないと云ひ出したのは私には不可解の問題です、そして同時に女性に對する問題です。彼女は常に莫然たる思想を示しました、そして私達の別れは莫然たるものではありませんか。

——私の悩みは段々深刻になつて行きました、本當に悩む爲に生きて居るのと同じです。或る時彼女のお父さんに——私は彼に少しも尊敬を拂つて居りません、彼が moneylender であると云ふ考へが私の頭の中にこびり附いて居るのです、そして選ふと何時でも彼の家を訪ねて行く貧しげな人世に疲れ果てた様な姿が想ひ出されるのです——選ひました。彼は恐ろしく不機嫌な顔をして私を凝視しました、それでも私はその彼に私の悩みを訴へようと考へた程です。

——十二月の初めに彼女の家に下宿して居る——家には二棟あつて、一方は後から病室として建て増されたものです、お父さんは軍醫をして居たことがあるので開業醫にならうとしたのだと彼女は言ひました。而も患者は全くと云つて好い位來ませんでしたから最近に病室は下宿間に早更りして仕舞つたのです。自分が讚美して來た彼女が單なる下宿屋の娘となつて仕舞ふのは私に取つては丁度純な心で禮拜して居る偶像を眼の前で汚される様なものでした——五高生と學校に行く道で過つた時彼等の口に彼女やその家のことが一寸上つて、一週間程前から彼女は病氣で臥せて居ると聞きました。私は其れを聞くとグワンと頭を撃たれる様な思ひがした、あれはミエチャンだ！

それは丁度一週間程前からのことです、夜寢に就いてから何時間か過ぎると——それも浅い浅い眠りです——必ず何物かに襲はれるのです。私の体が何處へか連れて行かれようとするから驚ろいて目を覺ますと体中が汗びつしよりになつて居て暫くすると一時が鳴るのを聞きました。それで、何故だらう、私の身も心もそんなに衰弱して居るのだらうかと不思議に思つて居た時彼女が病氣であることを耳にしたのです、ミエチャン！と私は直覺的に想ひました。そして考へて見ると夢魔に連れて行かれようとしたのは彼女の家の方へではありませんか、私の魂が彼女の病氣を知つてあゝしたのだらうか、疲れ切つて病的になつた心にはありそうなことですね、それとも病中の彼女の魂が私を求めたのだらうか、私はそう想つたのです。一方に私は怖れを感じず

には居られませんでしたが、ミエチャンが病氣で恐ろしいことだ！その日は私には重苦しい一日でした。彼女の病氣が段々重くなつて終に……と云ふ考へが一日私を苦しめました、彼女の瞋目した青白い動かない顔と黒い衣を頭から著流して新らしい墓の前に跪いて居る私の姿が一日眼の前にちらつきました。そして夜になると私は嘗つて幾度もした様に彼女の家の傍に行つて佇んで居ました、すると祈る心が起つて來ました、祈る！そんなことは數年來考へたこともなかつたのに其の夜は起つたのです。私は地に跪きました、そして彼女の爲に祈りました、長い間闇の中に祈つて居ました。

翌日も彼女の病氣のことが私を苦しめました、それを話した五高生にどんなに聞いて見たかつたでせう、然し彼女が後でそれに依つて苦しむのだと思へば出来ませんでした。そして夜は行つて祈りました、最後の怖ろしい幻影に苦しめられ乍ら。そして私はミエチャンを愛して居る、何うすることも出来ない程愛して居るのだと想ひました。

學期試験が初まりました、何にも見て行きませんでした、見ることが出来ないのです。落第と云ふ心配が起りました。それでも私は唯喪神せる者の如く彼女と會つた處や一緒に散歩した所をさまよひ歩くだけでした。所が試験の終つた日の夜私には今迄想像したこともないことが起つたのです、私はいつもの様に彼女の家の傍に行きました、すると急に彼女を憎む氣が起つたのです、憎しみ！本當に憎しみでした、彼女は私を餘りに苦しめはしなかつたか？私は哀しくなりました、周囲の紅や紫の華かではあるが大抵は毒々しい色彩を持つた多くの光の中に只一つ眞白に清らかに長らく輝いて居た美しい幻に對する愛である光に、消すことの出来ない汚點が印されたのだ！そう考へると惱みの中にも讚美して來た清純が喪はれた様な氣がしました。そしてもう彼女の爲に祈り得ないのだと思つて其の夜は直ぐに歸りました。途中で、彼女は私を苦しめたのだらうか、いや、苦しめたのではない、唯自分が悩んだだけだ、然し悩みの對象は？ミエチャンは矢張私を苦しめたのだ、否、彼女にはそんな意志は少しもない、でもあの結果は？と結末の附かないことを考へ續けました。

彼女は私を苦しめたのでせうか？

その夜以來彼女に對する憎しみが時々起りました、そして私は悲しくなつて祈りには行きませんでした。

——私の長い間の戀、それは終りが寔にそつけないものではありませんか、そして今、私の身も魂も其の爲に疲れ果て、仕舞ひました、不眠に苦しめられます。八月下旬新生活が創まつた當時太陽に接吻を投げる位力強い生命の躍動を覺えたのにもう求めたくともありません、死ぬるだけ氣力もない、生きて居ると云ふだけです、そして僅かに貧しき人々に對する愛の光が消えようとしては燃えるのみです。此の腹立をしたい程遅い時の流れを何うすれば好いでしょうか、哲學もやることが出来ません、讀書とか學科の勉強とかは勿論出来そうにもありません。全てを忘れてしまつて人聲を聞かない靜かな山の中か、修道院にでも逃れ度い。彼女に對する愛は益々深刻になつて行きます、相手に發表し得ない此の戀を何うすれば好いのでしょうか、時が経てば忘れると人が言ひます、然し其れ迄奈うしたなら待てるでせうか。

惠まれざる戀——餘りに儚なり初戀でした。

未だそれから離れて居ないのだけれども、彼女と一緒に散歩した夕べを想ひ出せば煩笑ますには居られません、悲しく惱ましい追想ではあるけれども。テニズンが歌つたではありませんか。

”Dear as rememberd kisses after death,

And sweet as those hopeless fancy feignd

On lips that are for others; deep as love,

Deep as first love, and wild with all regret,

O, Death in Life, the days that are no more,”

ほんとうにそうです。

コンキエビツSNSは殆んど私を苦しめません。でも私には戀愛摸索者の心理狀態が解る様です、餘り寂しいから。人間生活が嫌になつたけれども他方ではそう思ひます。然し、戀愛を摸索する、それは私には怖いことです。

——彼女の病氣を話してくれた五高生は其の時彼女のお母さんがステツプであること、彼女一家が周圍から暗い眼を以つて見

られて居るらしいことを話しました。ステツプであるのは私の古い記憶の中にある様です、でも彼女はそれを私に話しませんでした。何故話さなかつたのでせうか。そして money-lending に付いても只困つた人だけに何でもなさそうに彼女は私に言ひました、それは私が聞いたからです、私も残酷なことをしたものです。自分一家が暗い眼を向けられて居るのを彼女は氣附かなかつたでせうか、いや、そんな筈はありません。友達もありませんと彼女は言つたし兄弟も無い彼女は獨り心の中で其れ等のことの非常に惱んで居るに相違ないので、彼女は無口な性質であつたから私に話さなかつたのでせう、彼女も矢張寂しい不幸な人間ですね、可哀想に――。

彼女の病氣は何うなつたか知りません、來年の入學試験に成功してくるれば好いと思ひます。(終リ)